

とんとむかしもあつたそうな

むかし、百日日照りといって、百日もの間、雨が降らないことがありました。田畑の作物はかれるし、悪い病気がはりました。

ひとりのお医者者が、病気にかかつて、死んでしまいました。

「雨だれ三寸三途の川」とことわざにあるように、このお医者も、泣く泣く、六道の辻からひとり、三途の川を船で渡つて、あの世への旅に出ました。

あの世の入り口には、えんまの庁があつて、えんまさんが、死んで来た人を、地獄へやるか、極楽へやるかを決めます。えんまさんのそばに、浄玻璃の鏡というのがあつて、この鏡に、この世でした善い事、悪い事がみな映るしかけになつていきます。

さて、お医者は、えんまさんの前に出て、恐る恐る申し上げました。

「わたしは、医者でございます。生きとる時分は、ずいぶんと人を助けました。どうぞ、極楽のほうへおたのみ申します」

えんまさんは、

「ならん、ならん。おまえは生きとる時分、薬じやというてうどん粉を売りつけたり、治つた病人を、まだ悪いといつて薬代をごまかしたりした。極楽へはならん。地獄へ行け」としかりつけました。

お医者はしかたがないので、地獄への道を行きかけました。けれども、

「こんなさびしい道をひとりでは行きたくない。そのうちだれぞ来るじやろう」と思つて、道ばたにこしを下ろして待っていました。

すると、ひとりの山伏が、数珠を首にかけ、大きなほら貝を下げてやって来ました。

お医者が見ていると、山伏は、えんまさんの前に出て、

「わたしは、生きとる時分は、神さんにたのんで病気を治したり、人を災難から助けたりしました。どうぞ、極楽のほうへおたのみ申します」といって、頭を下げました。えんまさんは、

「ならん、ならん。おまえは、神さんのたたりじやといつて、何でもないのでに挿んでお礼をもうたりたり、神さんのお告げじやといつて世間の人にほらばかりふきよつた。極楽へはならん。地獄へ行け」としかりつけました。

山伏が、すぐすぐえんまの庁を出て来たので、お医者も、

「山伏どの、力を落とすな。わしも地獄行きじや。いっしょに行かんか」と、声をかけました。ふたりが行きかけると、鍛冶屋が大きななづちを下げてやって来て、えんまさんの前に出ました。えんまさんは、

「おまえは、仕事ができもせんのに、明日できる、明日できるというて、うそをついたり、悪い鉄を使うたりした。おまえも、地獄へ行け」としかりつけました。

鍛冶屋が、すぐすぐ出てきたので、お医者も山伏も、

「おい、鍛冶屋よ。わしらも地獄行きじや。三人で仲良く行かないか」と声をかけまし

た。

こうして、お医者と山伏と鍛冶屋は、三人連れ立って地獄への道を歩いて行きました。やがて、地獄の入り口に着きました。門番の赤鬼が、

「おまえらは、つるぎの山じゃ。早く行け」といって、白木の戸を開けました。三人が入って行くと、大きな山に、抜身のつるぎが、上に向けていっぱい生えていました。登ろうとしても、足を乗せるすきまもなく、ひと足も歩けません。お医者と山伏は泣きだしました。すると、鍛冶屋がいました。

「泣かんでもいいぞ。わしは鍛冶屋だ。これしきのつるぎ、なんでもない事じゃ」

鍛冶屋は、かなづちで、つるぎの金（かね）をたたき、金（かね）のわらじを三足作りました。三人が、そのわらじをはいてつるぎの山に登ると、つるぎはポキポキと折れました。三人は、

「あとから来た者のためじゃ。この山のつるぎをみんな折ってしまえ」といって、山の上で、七日七晩おどりました。それで、つるぎはみんな折れてしまいました。

鬼どもはびつくりして、えんまの庁にとんで行きました。

「えんまさま。たいへんでございます」

「どうしたのじゃ」

「医者と山伏と鍛冶屋が、つるぎの山をぶつつぶしてしまいました」

えんまさんは、

「そうか。そんなら、あの三人は、地獄のかまでゆでてしまえ」といいました。

鬼どもは、地獄のかまのふたを開け、水をいっぱい入れてわかし始めました。お湯はやがて、とんぼ返りするほど熱くわき返りました。三人は、ぐらぐらわいている地獄のかまの前に引き出されました。お医者と鍛冶屋は、泣きだしました。すると、山伏がいました。

「泣かんでもいいぞ。わしは山伏じゃ。これしきの湯、なんでもない事じゃ」

山伏が、水の印を結んで呪文をとなえると、たちまちお湯は水になりました。山伏は、「気づかいござらん。お入りなされ」といって、金のわらじも脱がずに、かまに飛びこみました。あとのふたりも飛びこみました。熱くもなんともありません。三人は、かまのなかで、金のわらじをはいたまま、七日七晩おどりました。とうとう、地獄のかまの底が割れてしまいました。

えんまさんは、鬼どもを集めて相談しました。そして、

「おまえらの中でくじ引きをして、くじに当たったものが三人を飲んでしまえ」といいました。そこで、赤鬼やら青鬼やら、千匹もの鬼が集まってきて、くじ引きをしました。すると、大きな赤鬼がくじに当たりました。

赤鬼は、耳まで裂けた大きな口を開け、三寸もある歯をむき出して、のっしのっしとやって来ました。山伏と鍛冶屋は泣きだしました。すると、お医者がいきました。

「泣かんでもいいぞ。わしは医者じゃ。わしが先に鬼の口に飛びこむから、ふたりも続いて来い」

お医者は、赤鬼の口に飛びこむなり、しびれ薬をばらりとまきました。赤鬼は、口がしびれてかむこともできず、口を開けたまま、よだればかりをたらしめました。そこへ、山伏と鍛冶屋が飛びこみました。のどを通りすぎると、お腹の中は、海まで続くかとうほどの広さでした。三人は、金のわらじで、おどりまくりました。赤鬼は、

「やめてくれえ、やめてくれえ」と泣きだしました。

お医者は、

「さて、こんな暗いところにいっまでもおるわけにはいかん」といって、下し薬をばらりとまきました。とたんに、赤鬼は、便所に行きたくなりました。三人は、鬼の便所に、べたべたべたと、落ちこんだということです。

人をくそにした話じゃと

原話…『全国昔話資料集成10 東祖谷昔話集』細川頼重／岩崎美術社

再話…村上郁